

陰翳礼賛

いんえいらいさん

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

谷崎の随筆と建築人

「美というものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生れているので、それ以外に何も無い。」

近代日本の文豪、谷崎潤一郎の随筆「陰翳礼賛」（昭和八〜九年）の一節である。

なぜ建設業の業界誌で谷崎の「陰翳礼賛」なのか。土木界の様子は、京都市や奈良の寺院へ行っても、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き届いた厠へ案内されることに、つくづく日本建築の有難みを感じる。

そして、和紙、漆器、羊羹、深い庇を持つ屋根、日本座敷、暗がりの中にある金襴や金屏風、日本人の皮膚と能衣装の取合せ、日本女性と着物の取合せ等々と話題は移る。そして最後に、自分は文学において日本美の再構築をやってみようかと半ば宣言する。

「私は、われわれが既に失いつつある陰翳の世界を、せめて文学の領域へでも呼び返してみたい。文学という殿堂ののきを深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい。」と。

はわからないが、建築界では「数多ある書物の中でも取分け『陰翳礼賛』には刺激を受けた」とする者が珍しくないし、学生の課題書籍にしている大学もあると聞く。

明治維新以降、日本古来のものとは大きく異なる西洋建築の意匠と技術が導入され、長らく「日本らしさ」をどう考えどう扱うかは建築

界の大きなテーマだったし、その議論はしばしば再燃してきた。そもそも「建築」という言葉自体、西洋の「Architecture」の訳語として考えられたものである。そんな

中、日本独自の美を具体的に論じた谷崎の随筆は、それが日本を代表する作家のものであったことも手伝って、多くの建築人に読まれ、



旧古市公威邸（現登録有形文化財、瀬川家住宅）
明治期に建てられたこの近代土木のその居宅も谷崎に礼賛されるべき陰翳に満ちていた。
（写真：BS朝日『百年名家』より）

そして、読者にも語りかけるような一文で結ぶ。

「まあどういう工合になるか、試しに電燈を消してみることだ。」

試しに電燈を消してみる

流石谷崎潤一郎、この結語は見事だ。明治維新以来懸命に吸収し我がものにしてしようとしてきた西洋

心の支えにもなってきたのである。

日本の美

この随筆を書くにあたっての谷崎の心持ちは、はっきりしている。

「西洋の方は順当な方向を辿って今日に到達したのであり、我らの方は、優秀な文明に逢着してそれを取り入れざるを得なかった代りに、過去数千年来発展して来った進路とは違った方向へ歩み出すようになった、そこからいろいろな故障や不便が起つていると思われる。」

谷崎自身、そういうこと、つまり西洋文明と出会う前に戻ってやり直すなどということを考えるのは

しかし、谷崎がそう綴ってから八五年を経た時点に立つてみると、西洋文明との比較における日本らしさなどという捉え方自体が、生々しさを失っている。谷崎が好きだった厠は経験することができない。薄暗い中、漆器で食事をする機会もなかなかない。深い庇が陰翳をつくる屋根を見つけることはた易いことではない。日本座敷は新築の世界では例外的な存在だ。日本女性と着物の取合せは冠婚葬祭ですら見られるか見られないか微妙な時代だ。

現代を生きる私たちには、試しに消してみるべき電燈があるのかを、谷崎の電燈とは別に考えなければならぬ。それは、単に日本らしくないものということではない。また、現在当たり前とされていることを見直すということでもない。何か私たちがこの数十年の間に捨ててしまったものがあり、その代わりに得ているものがあるという「小説家の空想」を働かせることが必要だし、それは磨かれた美意識に基づく。才を要する至難の業だ。